

1 / 2 ; 障害者施設 (公営)

※保育幼稚園のとなり

10:00~12:00



【概要】

■園長より

○概要：この地域は1890年1つの町であった。1970年代からいまのような郊外となり一等地になっている。デイは別の組織が運営しており、当時のままの建物(約120年)を利用している。住居の施設は新築であり、歴史ある建物と調和がとれるように設計されている。地域の一つの住居という位置づけのため、特別感はない。常に地域住民と同じ感覚で生活している。よって、全国18団体(市町村)から希望者が移ってくるほど環境やサービスへの評判が高い。運営費(予算)は約7000万クローネ(1億2千万くらい)、指導員給与 41万5千クローネ程度。

○設備：ダイルームや居室など、住人が居るところすべてに天井走行リフトが入っている。(あたりまえ) 部屋にはシャワー室、トイレが完備。キッチンが共用で、できるだけ住人も食事づくり(調理)に関わる。



○処遇：スタッフは全部で60名ほど。(アルバイト、間接スタッフ含む) 4つのポイントに則って計画をたてる。①精神 ②身体 ③健康 ④医療(薬) 特にトレーニングに積極的でない人は、遊びの中でトレーニングになるよう工夫をする。訓練となると義務になるので、気持ち的な負荷とならないよう楽しく行えるようにするのが自分たちの仕事。日中、授産やデイに行けない人は一日ホームで過ごす。かならず何かしらのアクティビティを行う。(ホースセラピー用の馬は2頭)



○住人（入居者）経済状況：ノーマライゼーションの考え方として「誰もが同じ」という点は経済に関してもいえる。特別扱いは無く、自助が前提。

年金1万クローネ — 補助金3千—利用料7~8千=おこづかい。居室は、高齢者施設と同じく全て個室(リビングと寝室)、天井リフトはもちろん、清潔なバストイレが付属している。

(トイレも跳ね上げ式の肘がマスト)昨日訪れた保育幼稚園の子供たちがワイワイ通過していった。まさに子供から高齢者までいろいろな人がいることが日常生活になっている。



■生活指導員より

- ・障害者だけでなく健常者と共に地域社会の一員として生きていく（いける）環境にあるのが、ここのホームコンセプト。「その人が何ができないか」をみるのではなく「何ができるようになるか」とポジティブに考えることがノーマライゼーション。
- ・身障者の方に用意するのではなく、普通に皆がいる場に入れるようサポートするのがわたしたちの役目。(例えばバスに乗る、映画館に行く、旅行に行く)
- ・それが可能となるよう社会全体のバリアフリー化が進んでいる。バスも車椅子の人が一人で乗れるよう低床になる、段差がない等。
- ・最終的なゴールは「彼らがサポート無しでも一人で普通にできるようになること」
- ・課題は、自己決定と目標とのバランスが難所。自立していくために“見守る”ことも大事であるため、日本からしてみると放っておくように見えるかもしれ無い。人にやってやってもらった方が楽なのは否めないが、それを自立にもっていくのが指導員としての役目。

○ どこに訪問してもお茶でもてなしてくれる。焼きたてのクッキーと共に。



2/2 ; デイセンター（公営） 市民福祉センターのような位置づけ

13:00～15:00

センターにてランチ。誰でもランチを食べることが出来るため、交流の場にもなっている。調理チーフ（写真左）がセンターにおける「食事」の位置づけを熱く語ってくれた。素材は60%程度オーガニックを使用。温かで体に良いものを厨房で全て作っている。最近アンケートを取ったが、オーガニックであること以上に国産の素材を使ってほしいという回答が多かった。国で推進している食品ロスを減らすためにも、利用者に食べられる量を聞いてお皿に盛っている。



■概要

○センター長より

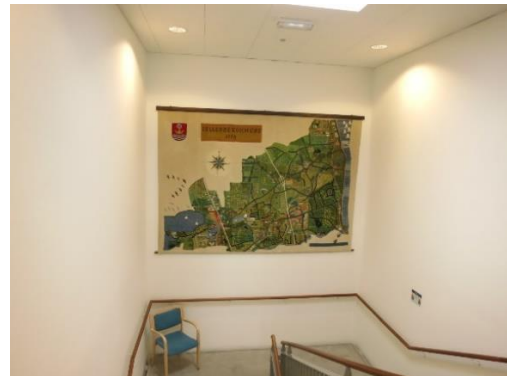
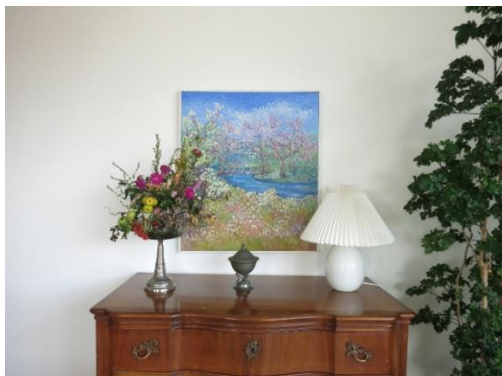
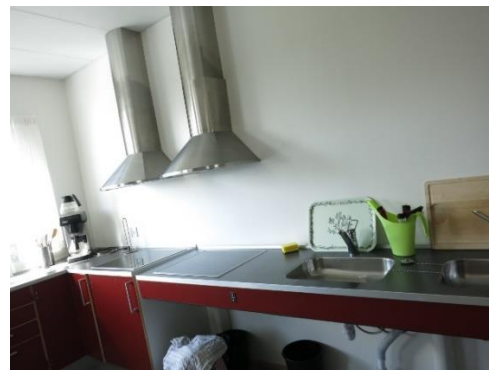
自宅生活を継続するためというコンセプトのもと、2012年に改築。スタッフは常勤はセンター長含めて5人のみ。あとはボランティア50人が登録しているが、利用者兼任者も多く80代～90代も活躍している。（90代以上10人ほど）センター利用者はとても多く、現在予約待ちの状態利用率高く運営できている。送迎は有料（4カ月390クローネ；7千円）引きこもり予防への対処はデンマークでも課題となっている。72歳以上を対象に自治体が訪問しているが、孤立から引き出すには、そうなる前からのアプローチが必要。

○設備・アクティビティ（予約制）

部屋は移動式間仕切りで小さく区切ることが可能。リハビリではなく予防を兼ねた体力維持のアクティビティが豊富。日本と同じで脚力を強化することが非常に重要視されている。グループレクレーションの椅子は座面の高さが低い・高いがあり選ぶことが出来る。椅子体操は軽度（椅子に座らないとできない）、軽度（+）立ち上がりにサポート必要、中度（自立）の3段階に分けてピラティス、ヨガ、合唱などさまざまなアクティビティを行う。クラブ活動もあり手芸が人気。

屋外には、自転車、歩行、ランニング、水泳などのプログラムもあり65歳以上の自立した人が誰でも健康を保つそして社交場として活用ができる。





■デイサービス

定員は25名。現在50名の登録がある。10時～11時の間に来訪、14～15時の間に帰るタイムスケジュール。利用料は一日108クローネ(2,000円弱) 送迎とランチがついている。人気は遠出、音楽鑑賞、ニュースを読む聞くことだが、やはり一番の楽しみは“人と会って話すこと”。(見学当日は、女性6名ほどのグループが楽しそうにお茶をしていた。この日は馬車に乗ってきたとのこと) お風呂は必須ではなく、自宅でヘルパーの対処が難しい人のみシャワーを浴びる。提供する内容日本とは大差ない様子であったが、ベットはなく常に起きて人との関りを持ち、体と脳を動かして帰る内容となっている。本人の体力を維持向上するデイサービスの機能をスタッフそして利用者本人が十分理解して活用されている。

■総評

4日目までに、自治体をはじめ、公設公営、民設民営の高齢者、保育、障害分野の機能拠点を視察したが、いえることは国⇒自治体⇒現場が一貫して「自助自立」が成立するために、あらゆる資源を活用できるような仕組み作りをし、現場はそれを活用する循環ができているということだ。個々のケースを丁寧に大事に対処しながら、食事・運動・社会との交流の場を用意し、人としての尊厳が維持される、尊重されるがために自由さもあり、自己肯定感も高いのではないだろうか。また、これらは色々な段階を経た「現在」である。そのために人と必要なのは費用と時間であり、それを国民一人一人が出し合って成立してきたという歴史を感じた。だからこそその専門職としてのステイタス、レベルの高さもあるだろう。看護師、PT、OTの知識と実践を筆頭に介護職員が日常生活をサポートする。その連携力や学習を繰り返していくキャリア構築は、日本も見習うべき点の一つである。点ではなく面でつながった仕組み、そして成果出せる組織にするには何をどうすべきか。海光園はどのレベルにあるのか。少し見えた気もしつつ、方向性は間違っていないどころか、やはり進化し続けられているという確信が得られた。

やはり未来を創るのは人の育成と能力開発が鍵である。

以上